

化粧行動に対する意識

松本友里

目 的

女性の化粧行動の歴史は古く、今日でも世界中で広く見られる行為である。古くは魔除けや社会的地位を示す為に、または健康維持の為に化粧は施されてきた。そして現在でも、化粧は美しく装い、他者から受ける印象を操作し、対人関係を円滑にするための道具の一つとして使用されている。また、最近では、痴呆性高齢者やうつ病患者へのリハビリテーションにも用いられている。

しかし、化粧行動の有無や程度は人それぞれであり、特に異文化間ではその差異も大きいと考えられる。化粧行動やそれに対する意識は異文化間ではどのように異なり、関連する要因は何だろうか。

まず文化社会的な要因として、化粧をすることを社会から期待されていると見なしているかどうかということが考えられる。日本人は欧米人に比べて役割志向性、すなわち周囲からの期待を自らの目標として遂行する意識が高いと言われている(北山、1998)。化粧に関して言えば、西欧では古くから化粧の全面否定がなされてきたのに対し、日本では「夫のために身を飾ることは女性としての義務である」という儒教的な女性観があり、化粧行為そのものへの批判は少なかったと言われている(村澤、2001)。このことから、日本人女性は化粧を礼儀や役割の一つとして施す傾向があるのではないかと推測できる。また、Cash, Russi & Chapman (1985) は、化粧度、つまり普段外出時に使用する化粧品数の多い女性ほど女性性が強く、性役割に関してはリベラルであることを報告しているが、これは一般的な性役割であって化粧行動に限ったものではない。化粧に関する役割志向性についてもっと検討してみる必要があるだろう。

また、別の要因として自己肯定感が考えられる。化粧は自分の容姿への満足度を上昇させ(Cash, Dawson, Davis, Bowen & Galumbeck, 1989)、積極的な自己呈

示や印象操作の手段として他者からの肯定的な評価を得るために使用されている。しかし、飛田(1996)によると、他者からの否定的な印象を回避することも化粧をする大きな理由であるのだという。容姿は対人魅力に関わる大きな要因の一つであり、対人関係だけでなく自己への満足感や自信にも影響すると言える。容姿への自信のなさが自己への否定的な考えを生み、それを補償するために化粧を施すとも考えられるだろう。以上のことを踏まえて、異なる文化では自己の捉え方や在り方が違うという文化心理学的な視点から、自己肯定感に文化差があり、それが化粧行動の差異をもたらしていると推測できる。

本研究の目的は、日本人と英語圏出身者の化粧行動と化粧行動に対する意識について比較をし、その相違点を化粧に関する役割志向性と自己肯定感という視点から考察することである。

方 法

化粧に関する役割志向性尺度を作成するため、2004年の夏に予備調査(協力者:日本人女子大生112名)を実施した。その結果を踏まえ、本調査は2004年の秋に実施し、協力者は18歳から30歳までの日本人女性356名(学生317名、社会人39名)と英語圏出身女性72名(学生14名、社会人58名)であった。全体の平均年齢は21.21歳、日本人は平均20.54歳、英語圏出身者は平均24.54歳であった。本調査で用いた質問紙は日本語と英語で作成し、構成は以下のとおりであった。

① フェイスシート

日本人、英語圏出身者の両方に年齢と職業を尋ねた。職業は学生か学生でないか(社会人)で回答してもらい、英語圏出身者には現在住んでいる国と育った国を尋ねた。

② 化粧度

ファンデーション、チーク、アイブロー、アイシャドウ、アイライナー、マスカラ、口紅の各化粧品について、外出時にどのくらいの頻度で使用するかを尋ねた。「1：全く使用しない」－「5：いつも使用する」の5件法で答えてもらい、その合計点を化粧度とした。また、状況によって化粧の有無や程度を変えるかどうかを「1：全く変えない」－「4：とても変える」の4件法で尋ねた。

③ 化粧をする理由・目的

松井ら（1983）の研究で使用された化粧の目的を問う質問紙と、その結果から提唱された化粧行動がもたらす効用感を基本に、16の項目を作成し、回答者が化粧をする理由・目的としてそれらがどれくらいあてはまるかを「1：あてはまらない」－「5：あてはまる」の5件法で尋ねた。16項目の信頼性は高かった（ $\alpha = .86$ ）。因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ固定値が1.0以上の因子が4つ抽出され、それぞれ高い因子負荷量を示した項目の評定値平均を下位尺度として使用した（表1）。各々の項目の内容から、第1下位尺度を〈対人効果〉、第2下位尺度を〈気分高揚〉、第3下位尺度を〈補償〉、第4下位尺度を〈礼儀〉と命名した。

④ 化粧に関する役割志向性尺度

予備調査では、「私は社会人になったら化粧をすることが最低限のマナーだと思う」等、回答者自身がどのように考えているのかを問うものと、「女性が化粧をすることは最低限のマナーだと考えられている」のように、回答者の属する社会がどのように期待していると回答者が考えているのかを問うものを、それぞれ10項目ずつ用意し、「1：あてはまらない」－「4：あてはまる」の4件法で回答してもらった。信頼性を低めているものを削除し、項目を選択し、全部で11項目の質問紙を作成した。本調査では5件法で回答してもらった。因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い、最終的に8つの項目から成る1つの因子が抽出された（表2）。どの項目も高い因子負荷量を示し、信頼性も高かった（ $\alpha = .87$ ）ため、各々の合計値を化粧に関する役割志向性尺度として使用した。

⑤ 自己肯定意識尺度（平石、1990b）

平石が作成した、自己肯定性次元の個人差を対自己領域と対他者領域の2つに分けて測定する自己肯定意識尺度を用いた。全41項目を「1：あてはまらない」－「5：あてはまる」の5件法で回答してもらい、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った。最

表1 化粧の目的・因子分析結果

| 項目内容 | 因子 | | | | 共通性 |
|--------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------|
| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | |
| 5 異性から魅力的に思われたい | .792 | .167 | .197 | .051 | .696 |
| 15 同姓から魅力的に思われたい | .644 | .310 | .251 | .191 | .610 |
| 2 人から女性らしいと思われたい | .602 | .175 | .213 | .112 | .451 |
| 9 人の目を引きたい | .595 | .481 | -.066 | .067 | .594 |
| 6 自分に自信が持てる | .527 | .370 | .453 | .128 | .636 |
| 4 周りの人がしている | .348 | .063 | .136 | .150 | .166 |
| 14 元気になる | .267 | .699 | .307 | -.038 | .655 |
| 3 ストレス解消になる | .094 | .697 | .309 | .068 | .595 |
| 8 化粧行為自体が楽しい | .252 | .660 | .001 | .079 | .504 |
| 11 人に対して積極的になれる | .348 | .503 | .385 | .141 | .530 |
| 10 欠点をカバーするため | .239 | .150 | .538 | .299 | .458 |
| 13 化粧をしないと落ち着かない | .192 | .448 | .506 | .173 | .523 |
| 1 素顔の自分とは違う自分になりたい | .371 | .199 | .493 | -.012 | .420 |
| 12 人に悪い印象を与えたくない | .145 | .136 | .346 | .622 | .546 |
| 7 身だしなみのため | .104 | .054 | .056 | .570 | .342 |
| 16 社会的立場上 | .050 | -.062 | -.001 | .531 | .284 |
| 因子寄与率 (%) | 16.716 | 15.467 | 10.146 | 7.751 | |
| 信頼性係数 (α) | .8266 | .8107 | .6796 | .5925 | |

最終的に固定値が 1.0 以上の因子が 5 つ抽出され、それぞれ高い因子負荷量を示した項目の評定値平均を下位尺度として使用した (表 3)。各々の項目の内容から、第 1 下位尺度を〈充実感〉、第 2 下位尺度を〈自己表明〉、第 3 下位尺度を〈自己閉鎖性〉、第 4 下位尺度を〈被評価意識〉、第 5 下位尺度を〈自己実現的態度〉と命名した。

結果と考察

日本人と英語圏出身者との間に化粧度の差はなかった (表 4 - 1)。各化粧品については、ファンデーション ($t = 4.418, p < .01$)、チーク ($t = 4.760, p < .01$)、及びアイブロウ ($t = 7.782, p < .01$) は日本人が英語圏出身者に比べてより頻繁に使用し、アイライナー ($t = -4.596, p < .01$)、と口紅 ($t = -3.142, p < .01$) は英語圏出身者がより頻繁に使用していた (表 4 - 2)。アイライナーや口紅に対して、ファンデーション、チーク、アイブロウは、メイクアップの道具というよりは素顔に少し手を加え、素顔の魅力を強調する化粧品と言えるだろう。つまり、日本人は英語圏出身者に比べてより素顔に近い化粧を施しているとも推測できる。このことは、日本人がナチュラルメイクを好む傾向にあるという大坊 (2001) の見解とも一致している。

また、英語圏出身者のほうが日本人に比べて状況によって化粧の有無や程度を変える傾向にあった ($t = -5.755, p < .01$) (表 4 - 3)。

化粧をする目的について〈礼儀〉は日本人が有意に高かった ($t = 6.310, p < .01$) (表 5 - 1)。各項目については、〈礼儀〉を構成する「身だしなみのため」「社会的立場から」「人に悪い印象を与えないため」に加え、「欠

点をカバーするため」と「人に対して積極的になれるから」において日本人が英語圏出身者に比べて有意に高かった。それに対し、「異性に魅力的だと思われるため」「人の目を引くため」「元気になるから」は英語圏出身者が有意に高かった (表 5 - 2)。日本人は否定的な自己を補うために化粧をし、英語圏出身者はより魅力的な自分を引き出すために化粧をされると考えられるだろう。また、化粧に関する役割志向性も日本人が英語圏出身者より有意に高かった ($t = 12.742, p < .01$) (表 6) ことから、日本人のほうが化粧を礼儀や社会的役割として意識していることが分かった。

自己肯定感は英語圏出身者が日本人に比べて有意に高かった ($t = -8.640, p < .01$) (表 7)。細かく見てみると、英語圏出身者は日本人よりも〈充実感〉 ($t = -8.272, p < .01$)、〈自己表明〉 ($t = -11.301, p < .01$)、そして〈自己実現的態度〉 ($t = -10.075, p < .01$) が高かった。つまり、英語圏出身者はより充実感を持ち、対人場面での自己表明が積極的で、かつ自己を積極的に高めていく意識が強いと言える。また、日本人は〈自己閉鎖性〉が英語圏出身者に比べて高かった ($t = 5.451, p < .01$) ことから、より他者に対して心理的距離を置く傾向にあると推測できる。〈被評価意識〉は両者に差がなかった。

また、化粧に関連する要因について日本人と英語圏出身者の比較をすると、いくつかの相違点が見られた。まず、日本人-英語圏出身者共に化粧に関する役割志向性と化粧度との間に弱い正の相関が見られた (日本人: $r = .26, p < .01$, 英語圏: $r = .33, p < .01$) (表 8、9)。このことから、化粧を礼儀や役割として捉える人ほど化粧を使用する頻度が高い傾向にあることが分かった。また、〈被評価意識〉と化粧の目的の一つである〈対人

表 2 化粧に関する役割志向性・因子分析結果

| 項目内容 | 因子 | 共通性 |
|--------------------------------|--------|------|
| | 因子 1 | |
| 4 私は職場では化粧をすることが当たり前だと思う | .847 | .718 |
| 1 私は社会人は化粧をすることが最低限のマナーだと思う | .802 | .643 |
| 8 職場では化粧をすることが求められている | .779 | .607 |
| 6 女性が化粧をすることは最低限のマナーだと考えられている | .769 | .591 |
| 10 私は人と会うときに化粧をすることは礼儀だと思う | .767 | .588 |
| 9 私は公の場であっても化粧はしたい人だけがすればいいと思う | .496 | .246 |
| 5 女性は社会から化粧をすることを期待されている | .480 | .230 |
| 3 大人の女性が化粧をすることは常識だと考えられている | .421 | .177 |
| 因子寄与率 (%) | 47.487 | |
| 信頼性係数 (α) | .87 | |

表 3 自己肯定意識尺度・因子分析結果

| 項目内容 | 因子 | | | | | 共通性 |
|---------------------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------|
| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | 因子5 | |
| 5 生活がすごく楽しいと感じる | .688 | .287 | -.299 | -.038 | .210 | .691 |
| 17 充実感を感じる | .679 | .348 | -.141 | -.054 | .315 | .703 |
| 36 満足感がもてない(*) | .610 | .067 | -.335 | -.216 | .267 | .607 |
| 22 精神的に楽な気分である | .606 | .257 | -.296 | -.221 | .037 | .580 |
| 31 自分はこのびのびと生きていると感じる | .558 | .413 | -.316 | -.219 | .138 | .649 |
| 15 張り合いがあり、やる気がでている | .548 | .370 | -.160 | -.004 | .351 | .587 |
| 41 ころから楽しいと思える日がない(*) | .517 | .051 | -.457 | -.105 | .160 | .515 |
| 25 前向きな姿勢で物事に取り組んでいる | .511 | .412 | -.184 | -.044 | .278 | .544 |
| 11 わだかまりがなく、スカッとしている | .508 | .222 | -.245 | -.296 | .034 | .456 |
| 27 自分の好きなことがやれていると思える | .499 | .368 | -.212 | -.117 | .353 | .568 |
| 16 疑問だと感じたらそれらを堂々と言える | .095 | .656 | -.133 | -.204 | .132 | .517 |
| 26 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる | .194 | .639 | -.148 | -.304 | .086 | .567 |
| 4 相手に気を配りながらも自分の言いたいことが言える | .144 | .609 | -.112 | -.113 | .120 | .432 |
| 30 人前でもありのままの自分を出せる | .252 | .577 | -.345 | -.277 | .135 | .611 |
| 1 自分なりの個性を大切にしている | .299 | .524 | -.009 | -.055 | .269 | .439 |
| 10 自分のなっとくのいくまで相手と話し合うようにしている | .103 | .509 | -.125 | -.007 | .137 | .304 |
| 21 友だちと真剣に話し合う | .185 | .491 | -.300 | .052 | .292 | .453 |
| 38 自分の個性を受け入れている | .407 | .473 | -.069 | -.208 | .143 | .458 |
| 13 自分の良いところも悪いところもありのままに認められる | .362 | .397 | -.120 | -.225 | .128 | .370 |
| 14 自分は他人に対してところを閉ざしているような気がする | -.119 | -.296 | .705 | .170 | -.098 | .638 |
| 2 他人との間に壁をつくっている | -.095 | -.152 | .665 | .133 | -.057 | .495 |
| 39 他人に対して好意的になれない | -.121 | -.226 | .644 | .004 | -.198 | .520 |
| 24 私は人を信用していない | -.218 | -.059 | .633 | .075 | -.001 | .456 |
| 8 人間関係をわずらわしいと感じる | -.200 | -.129 | .570 | .166 | -.111 | .422 |
| 29 私は友達と一緒にいてもどこかさびしく悲しい | -.347 | -.049 | .555 | .288 | -.120 | .528 |
| 33 友人と話していても全然通じないので絶望している | -.052 | -.092 | .521 | .099 | -.102 | .303 |
| 19 自分はひとりぼっちだと感じる | -.292 | -.027 | .479 | .308 | -.110 | .422 |
| 35 自主的に友人に話しかけていく | .173 | .350 | -.357 | .018 | .086 | .287 |
| 32 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている | -.105 | -.070 | .079 | .810 | -.059 | .681 |
| 37 人から何か言われぬか、変な目で見られぬかと気にする | -.165 | -.195 | .153 | .698 | -.152 | .600 |
| 28 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる | -.094 | -.138 | .212 | .551 | .030 | .377 |
| 12 自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている | -.159 | -.088 | .153 | .515 | -.157 | .347 |
| 23 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている | .095 | -.036 | -.009 | .487 | .040 | .249 |
| 6 人に気をつかひすぎてつかれる | -.213 | -.062 | .253 | .449 | .066 | .319 |
| 40 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている | .297 | .301 | -.102 | .024 | .717 | .705 |
| 3 自分には目標というものがない(*) | .124 | .229 | -.192 | -.110 | .706 | .616 |
| 9 本当に自分のやりたいことが何なのか分からない(*) | .157 | .161 | -.165 | -.162 | .686 | .575 |
| 34 情熱をもって何かに取り組んでいる | .451 | .304 | -.102 | .034 | .586 | .630 |
| 20 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている | .340 | .374 | -.135 | .163 | .377 | 442.0 |
| 因子寄与率(%) | * | * | * | * | * | |
| 信頼性係数(α) | .92 | .86 | .86 | .78 | .85 | |

(*逆転項目)

表 4-1 日本人-英語圏出身者「化粧度」平均値

| | N | M | SD | df | t値 | p |
|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-------|
| 化粧度 | 日本人 | 351 | 21.85 | 7.108 | 421 | 1.875 |
| | 英語圏 | 72 | 20.17 | 6.093 | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表4-2 日本人-英語圏出身者「各化粧品」平均値（有意差が見られたもの）

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|----------|-----|-----|------|------|---------|---------|---------|
| ファンデーション | 日本人 | 356 | 3.80 | 1.37 | 95.738 | 4.418 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.94 | 1.52 | | | |
| チーク | 日本人 | 355 | 3.04 | 1.53 | 112.16 | 4.760 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.19 | 1.34 | | | |
| アイブロウ | 日本人 | 354 | 3.45 | 1.61 | 109.277 | 7.782 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 1.96 | 1.46 | | | |
| アイライナー | 日本人 | 355 | 2.51 | 1.50 | 116.519 | 116.519 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 3.28 | 1.25 | | | |
| 口紅 | 日本人 | 356 | 2.58 | 1.37 | 107.948 | 107.948 | .002** |
| | 英語圏 | 72 | 3.10 | 1.26 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表4-3 日本人-英語圏出身者「状況対応」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|------|-----|-----|------|-----|-----|--------|---------|
| 状況対応 | 日本人 | 329 | 2.79 | .72 | 392 | -5.755 | .000*** |
| | 英語圏 | 65 | 3.37 | .80 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表5-1 日本人-英語圏出身者「化粧をする目的」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|------|-----|-----|-------|------|--------|--------|---------|
| 対人効果 | 日本人 | 337 | 18.21 | 5.35 | 407 | -1.174 | .241 |
| | 英語圏 | 72 | 19.03 | 5.41 | | | |
| 気分高揚 | 日本人 | 334 | 10.32 | 4.24 | 120.74 | 0.415 | .679 |
| | 英語圏 | 71 | 10.13 | 3.41 | | | |
| 補償 | 日本人 | 337 | 9.07 | 3.20 | 406 | 0.818 | .414 |
| | 英語圏 | 71 | 8.73 | 3.03 | | | |
| 礼儀 | 日本人 | 335 | 11.07 | 2.45 | 405 | 6.31 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 9.01 | 2.73 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表5-2 日本人-英語圏出身者「化粧をする目的（項目別）」平均値（有意差が見られたもの）

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|-----------|-----|-----|------|------|---------|--------|---------|
| 異性への魅力 | 日本人 | 337 | 3.36 | 1.19 | 110.975 | -2.321 | .022* |
| | 英語圏 | 72 | 3.69 | 1.08 | | | |
| 身だしなみのため | 日本人 | 337 | 4.27 | 0.76 | 85.203 | 3.843 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 3.74 | 1.13 | | | |
| 人の目を引きたい | 日本人 | 337 | 2.30 | 1.10 | 95.096 | -3.626 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.89 | 1.27 | | | |
| 欠点をカバーしたい | 日本人 | 337 | 3.72 | 1.31 | 407 | 2.415 | .016* |
| | 英語圏 | 72 | 3.31 | 1.40 | | | |
| 人に対して積極的 | 日本人 | 335 | 2.54 | 1.28 | 120.144 | 3.31 | .001** |
| | 英語圏 | 71 | 2.07 | 1.03 | | | |
| 悪い印象を与えない | 日本人 | 335 | 3.37 | 1.19 | 94.85 | 4.549 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.57 | 1.38 | | | |
| 元気になる | 日本人 | 337 | 2.74 | 1.34 | 107.735 | -2.095 | .039* |
| | 英語圏 | 72 | 3.08 | 1.26 | | | |
| 社会的立場上 | 日本人 | 337 | 3.41 | 1.31 | 99.106 | 3.895 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.71 | 1.41 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表 6 日本人-英語圏出身者「役割志向性」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|-------|-----|-----|-------|------|-----|--------|---------|
| 役割志向性 | 日本人 | 352 | 27.89 | 6.19 | 422 | 12.742 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 17.74 | 6.02 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表 7 日本人-英語圏出身者「自己肯定感」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|---------|-----|-----|-------|------|---------|---------|---------|
| 自己肯定感 | 日本人 | 347 | 16.14 | 3.07 | 128.719 | -8.640 | .000*** |
| | 英語圏 | 69 | 18.81 | 2.17 | | | |
| 充実感 | 日本人 | 352 | 3.28 | .82 | 422 | -6.819 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 3.97 | .61 | | | |
| 自己表明 | 日本人 | 351 | 3.28 | .69 | 132.273 | -11.301 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 4.06 | .50 | | | |
| 自己実現的態度 | 日本人 | 354 | 3.28 | .91 | 140.846 | -10.075 | .000*** |
| | 英語圏 | 70 | 4.15 | .60 | | | |
| 自己閉鎖性 | 日本人 | 353 | 2.56 | .76 | 124.806 | 5.4510 | .000*** |
| | 英語圏 | 72 | 2.12 | .59 | | | |
| 被評価意識 | 日本人 | 353 | 3.12 | .77 | 422 | -1.050 | .295 |
| | 英語圏 | 71 | 3.23 | .88 | | | |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表 8 日本人の役割志向性と化粧度、状況対応、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 状況対応 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 |
|-------|--------|------|--------|--------|--------|--------|
| 役割志向性 | .260** | .041 | .331** | .232** | .303** | .344** |

両側検定 **.p<.01

表 9 英語圏出身者の役割志向性と化粧度、状況対応、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 状況対応 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 |
|-------|--------|-------|-------|------|------|--------|
| 役割志向性 | .330** | -.090 | .258* | .013 | .007 | .323** |

両側検定 **.p<.01

表 10 日本人の自己肯定感と化粧度、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 | 役割志向 |
|---------|-------|--------|-------|--------|--------|--------|
| 自己肯定感 | -.013 | -.058 | .054 | -.023 | .037 | -.090 |
| 充実感 | -.084 | .043 | .072 | -.001 | .052 | -.045 |
| 自己表明 | .007 | .041 | .116* | .052 | .100 | -.045 |
| 自己実現的態度 | -.013 | -.013 | .034 | -.014 | .101 | -.017 |
| 自己閉鎖性 | -.052 | -.001 | -.043 | -.041 | .013 | .013 |
| 被評価意識 | .075 | .359** | .108* | .222** | .157** | .252** |

両側検定 **.p<.01, *.p<.05

表 11 英語圏出身者の自己肯定感と化粧度、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 | 役割志向 |
|---------|-------|---------|--------|--------|--------|--------|
| 自己肯定感 | -.028 | -.406** | -.174 | -.249* | -.283* | -.243* |
| 充実感 | 0.45 | -.237* | -.146 | -.248* | -.281* | -.253* |
| 自己表明 | -.024 | -3.30** | -.188 | -.211 | -.162 | -.109 |
| 自己実現的態度 | .171 | .094 | .310* | .073 | .173 | -.008 |
| 自己閉鎖性 | -.092 | .243* | .149 | .204 | .324** | .128 |
| 被評価意識 | .180 | .553** | .315** | .247* | .340** | .161 |

両側検定 **.p<.01, *.p<.05

効果)との間に正の相関があった(日本人: $r = .36$, $p < .01$, 英語圏: $r = .55$, $p < .01$) (表10、11)。他者の存在、他者からの評価を気にする人ほど、対人場面での効果をより求めて化粧をする傾向にあると言えるだろう。英語圏出身者については、〈対人効果〉と自己肯定感との間に負の相関が見られた($r = -.41$, $p < .01$) (表11)。

以上が本研究で得られた主な結果であるが、ケース数や協力者の属性にばらつきがあったため、社会人のデータのみを抽出し、日本人・社会人と英語圏出身・社会人との比較を行った。日本人・社会人は英語圏出身・社会人よりも化粧度が有意に高かった($t = 4.502$, $p < .01$) (表12-1)。各化粧品については、ファンデーション($t = 5.399$, $p < .01$)、チーク($t = 4.656$, $p < .01$)、アイブロウ($t = 7.265$, $p < .01$)に加え、アイシャドウ($t = 3.100$, $p < .01$)と口紅($t = 2.372$, $p < .05$)も日本人がより頻繁に使用していた(表12-2)。アイライナーは英語圏出身・社会人がより頻繁に使用していた($t = -2.936$, $p < .01$)。英語圏出身・社会人は日本人・社会人よりも状況によって化粧の有無や程度を変える傾向に

あった($t = -.369$, $p < .01$) (表12-3)。

化粧をする目的については全体での比較と同じように〈礼儀〉は日本人が有意に高かった($t = 6.417$, $p < .01$) (表13-1)。各項目については、〈礼儀〉を構成する「身だしなみのため」「社会的立場から」「人に悪い印象を与えないため」に加え、「欠点をカバーするため」において日本人・社会人が英語圏出身・社会人が有意に高かった。「人の目を引くため」は英語圏出身・社会人が有意に高かった(表13-2)。

化粧に関する役割志向性は日本人・社会人が英語圏出身・社会人に比べて有意に高かった($t = 6.760$, $p < .01$) (表14)。また、日本人-英語圏出身・社会人共に化粧度と化粧に関する役割志向性との間に正の相関が見られた(日本人: $r = .48$, $p < .01$, 英語圏: $r = .35$, $p < .01$) (表16、17)ことから、日本人・社会人のほうが化粧を礼儀や社会的役割の一部として捉え、より頻繁に多種類の化粧品を使用する傾向にあると言えるだろう。

自己肯定感は英語圏出身・社会人が日本人・社会人に比べて有意に高かった($t = -4.550$, $p < .01$) (表15)。全ケースでの比較と異なった点は、〈自己閉鎖性〉が両

表12-1 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「化粧度」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|-----|-----|----|-------|------|----|-------|---------|
| 化粧度 | 日本人 | 39 | 25.32 | 5.17 | 95 | 4.502 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 20.31 | 6.36 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表12-2 日本人-英語圏出身者「各化粧品」平均値(有意差が見れたもの)

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|----------|-----|----|------|------|--------|--------|---------|
| ファンデーション | 日本人 | 39 | 4.38 | 1.07 | 98.804 | 5.399 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.97 | 1.52 | | | |
| チーク | 日本人 | 39 | 3.49 | 1.34 | 95 | 4.656 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.16 | 1.41 | | | |
| アイブロウ | 日本人 | 39 | 4.28 | 1.23 | 95 | 7.265 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.12 | 1.56 | | | |
| アイシャドウ | 日本人 | 39 | 3.79 | 1.17 | 95 | 3.100 | .003** |
| | 英語圏 | 58 | 2.95 | 1.41 | | | |
| アイライナー | 日本人 | 39 | 2.44 | 1.35 | 95 | -2.936 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 3.22 | 1.26 | | | |
| 口紅 | 日本人 | 39 | 3.82 | 1.32 | 95 | 2.372 | .002** |
| | 英語圏 | 58 | 3.19 | 1.26 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表12-3 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「状況対応」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|------|-----|----|------|-----|----|--------|---------|
| 状況対応 | 日本人 | 39 | 2.79 | .62 | 89 | -0.369 | .000*** |
| | 英語圏 | 52 | 3.35 | .76 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

者の間に差がないことであった。

また、日本人-英語圏出身・社会人共に、〈対人効果〉と〈被評価意識〉との間に正の相関があった（日本人： $r = .47, p < .01$, 英語圏： $r = .59, p < .01$ ）（表18、19）。ケース全体での結果と同様、他者の存在や他者からの評価

を気にする人ほど、対人場面での効果をより化粧に求める傾向にあると言えるだろう。日本人・社会人については化粧度と〈被評価意識〉との間に正の相関が（ $r = .33, p < .01$ ）、〈充実感〉との間に負の相関が（ $r = -.39, p < .05$ ）見られた。

表13-1 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「化粧をする目的」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|------|-----|----|------|------|----|--------|---------|
| 対人効果 | 日本人 | 39 | 2.90 | .82 | 95 | -0.764 | .447 |
| | 英語圏 | 58 | 3.04 | .91 | | | |
| 気分高揚 | 日本人 | 39 | 2.43 | .93 | 94 | -0.472 | .638 |
| | 英語圏 | 57 | 2.52 | .88 | | | |
| 補償 | 日本人 | 39 | 3.16 | .86 | 94 | 1.614 | .110 |
| | 英語圏 | 57 | 2.84 | 1.04 | | | |
| 礼儀 | 日本人 | 39 | 4.07 | .74 | 95 | 6.417 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.91 | .94 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表13-2 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「化粧をする目的（項目別）」平均値（有意差が見られたもの）

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|-----------|-----|----|------|------|--------|--------|-------------------|
| 身だしなみのため | 日本人 | 39 | 4.44 | .82 | 94.988 | 3.951 | .013 _* |
| | 英語圏 | 58 | 3.62 | 1.21 | | | |
| 人の目を引きたい | 日本人 | 39 | 2.33 | 1.01 | 91.85 | -1.994 | .026 _* |
| | 英語圏 | 58 | 2.79 | 1.25 | | | |
| 欠点をカバーしたい | 日本人 | 39 | 3.90 | 1.0 | 94.832 | 2.812 | .001** |
| | 英語圏 | 58 | 3.21 | 1.42 | | | |
| 悪い印象を与えない | 日本人 | 39 | 3.69 | .95 | 94.956 | 5.457 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.40 | 1.39 | | | |
| 社会的立場上 | 日本人 | 39 | 4.08 | 1.11 | 93.092 | 5.221 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 2.72 | 1.44 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表14 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「役割志向性」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|-------|-----|----|-------|------|----|------|---------|
| 役割志向性 | 日本人 | 39 | 26.38 | 6.35 | 95 | 6.76 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 17.9 | 5.87 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表15 日本人・社会人-英語圏出身・社会人「自己肯定感」平均値

| | | N | M | SD | df | t値 | p |
|---------|-----|----|-------|------|--------|--------|---------|
| 自己肯定感 | 日本人 | 38 | 16.59 | 2.83 | 92 | -4.550 | .000*** |
| | 英語圏 | 56 | 18.94 | 2.17 | | | |
| 充実感 | 日本人 | 39 | 3.37 | .73 | 95 | -4.803 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 4.01 | .57 | | | |
| 自己表明 | 日本人 | 39 | 3.26 | .71 | 61.879 | -6.651 | .000*** |
| | 英語圏 | 58 | 4.12 | .49 | | | |
| 自己実現的態度 | 日本人 | 39 | 3.25 | .82 | 93 | -4.550 | .000*** |
| | 英語圏 | 56 | 4.09 | .61 | | | |
| 自己閉鎖性 | 日本人 | 38 | 2.35 | .58 | 94 | 1.964 | .053 |
| | 英語圏 | 58 | 2.10 | .60 | | | |
| 被評価意識 | 日本人 | 39 | 2.80 | .79 | 95 | -1.937 | .056 |
| | 英語圏 | 58 | 3.14 | .87 | | | |

両側検定 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

さらに、化粧に対する役割志向性と自己肯定感に関する5つの尺度から日本人・社会人の化粧行動をどの程度予測できるかを検討するために、強制投入法による重回帰分析を行った。化粧度及び化粧をする目的の4つの下位尺度を予測変数に、化粧に関する役割志向性と自己肯定感の5つの下位尺度を説明変数にしたところ、化粧度については $R^2 = .26$ ($F(6,37) = 3.192$, $p < .05$)で、〈充実感〉($\beta = -.83$, $p < .01$)、役割志向性($\beta = .39$, $p < .05$)の2つの変数が選出された(表20)。他者からの評価を意識し、生活に充実感があるとあまり感じていない人ほど、より多くの化粧品をより頻繁に使用していると考えられる。また、英語圏出身・社会人については〈対人効果〉と〈自己肯定感〉との間に負の相関が($r = -.44$, $p < .01$)、〈気分高揚〉と〈自己実現的態度〉との間に正の相関が($r = .35$, $p < .01$)見られた。同様に化粧に対する役割志向性と自己肯定感に関する5つの尺度から英語圏出身・社会人の化粧行動をどの程度予測できるかを検討するために、強制投入

法による重回帰分析を行ったところ、〈対人効果〉については $R^2 = .33$ ($F(6,55) = 5.493$, $p < .01$)で、〈被評価意識〉($\beta = -.52$, $p < .01$)、役割志向性($\beta = .24$, $p < .05$)の2つの変数が選出された(表21)。他者からの評価を気にする人や、自己に対して否定的な人ほど、対人場面での効果を求めて化粧をすると考えられる。また、積極的に自己を高めていく人ほど、化粧によって気分を高揚させる傾向にあると言えるだろう。

以上のことから、日本人と英語圏出身者の化粧行動に対する意識の違いとして、まず日本人は化粧を礼儀や役割として捉えているのに対し、英語圏出身者は社会人であっても化粧を礼儀や役割として捉えることは少ないということがあげられる。また、日本人は欠点や自己の肯定できない部分を補償する道具として化粧を使用する傾向があり、英語圏出身者はより自分の魅力を高めていくために化粧を使用する傾向にあると考えられる。これには自己肯定感の高低によって化粧をする目的が異なるということが関連していると言える

表16 日本人・社会人の役割志向性と化粧度、状況対応、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 状況対応 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 |
|-------|--------|-------|------|------|------|--------|
| 役割志向性 | .476** | -.188 | .129 | .044 | .204 | .516** |

両側検定 ** $p < .01$

表17 英語圏出身・社会人の役割志向性と化粧度、状況対応、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 状況対応 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 |
|-------|--------|-------|-------|------|------|--------|
| 役割志向性 | .350** | -.091 | .271* | .067 | .085 | .429** |

両側検定 ** $p < .01$, * $p < .05$

表18 日本人・社会人の自己肯定感と化粧度、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 | 役割志向 |
|---------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|
| 自己肯定感 | -.217 | -.299 | .040 | .068 | .241 | -.033 |
| 充実感 | -.383* | -.250 | -.136 | -.024 | .193 | -.030 |
| 自己表明 | -.313 | -.201 | .077 | -.068 | .084 | -.203 |
| 自己実現的態度 | -.231 | -.277 | .049 | .019 | .012 | -.100 |
| 自己閉鎖性 | .026 | .318 | .117 | -.114 | -.095 | -.120 |
| 被評価意識 | .325* | .467** | -.100 | .019 | .061 | .219 |

両側検定 ** $p < .01$, * $p < .05$

表19 英語圏出身・社会人の自己肯定感と化粧度、化粧の目的との相関係数

| | 化粧度 | 対人効果 | 気分高揚 | 補償 | 礼儀 | 役割志向 |
|---------|-------|---------|--------|--------|---------|-------|
| 自己肯定感 | -.058 | -.436** | -.193 | -.314* | -.320* | -.162 |
| 充実感 | -.047 | -.231 | -.213 | -.315* | -.344** | -.205 |
| 自己表明 | -.074 | -3.32* | -.247 | -.285* | -.140 | -.001 |
| 自己実現的態度 | .208 | .056 | .353** | .110 | .168 | .019 |
| 自己閉鎖性 | -.050 | .284* | .267* | .286* | .379** | .079 |
| 被評価意識 | .228 | .591** | .303* | .323* | .334** | .141 |

だろう。

本研究の問題点のひとつとして、英語圏出身者のデータの少なさが挙げられるだろう。西洋文化圏かつ英語圏と出来る限り出身国も絞ったが、やはり多少文化のばらつきが懸念される。回答者の属性ごとにケース数を揃えることが出来れば、より興味深く有意義な結果が得られるだろう。また、化粧に関する役割志向

性についてももっと検討する必要があると思われる。役割志向性を的確に測るために尺度をより洗練させ、日本と同じ相互協調的自己観を持つとされる東洋文化圏内での相違点や、役割志向性の背景にある社会の化粧観、特に女性だけでなく男性の化粧観を検討するのも興味深い。また、自己肯定感と化粧行動の関連性についてもより深い検討が必要だろう。

両側検定 **.p<.01, *.p<.05

表 20 化粧度を予測変数、役割志向性・自己肯定感を説明変数とした重回帰分析（日本人・社会人）

| 予測変数 | 説明変数 | | | | | | R ² |
|------|-------|---------|------|------|-------|------|----------------|
| | 役割志向 | 充実感 | 自己表明 | 自己実現 | 閉鎖性 | 被評価 | |
| 化粧度 | .389* | -.825** | .210 | .417 | -.190 | .144 | .262** |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

表 21 〈対人効果〉を予測変数、役割志向性・自己肯定感を説明変数とした重回帰分析（英語圏・社会人）

| 予測変数 | 説明変数 | | | | | | R ² |
|------|-------|------|-------|------|------|--------|----------------|
| | 役割志向 | 充実感 | 自己表明 | 自己実現 | 閉鎖性 | 被評価 | |
| 対人効果 | .235* | .127 | -.064 | .026 | .120 | .515** | .329*** |

両側検定 ***.p<.001, **.p<.01, *.p<.05

引用文献

Cash, T. F., & Cash, D. W. 1982 Women's use of cosmetics Psychological Correlates and consequences. *International Journal of Cosmetic Science*, 4, 1-14 (高木、1996の引用による)

Cash, T. F., Russi, J., & Chapman, R. 1985 Not just another pretty face: Sex roles, locus of control, and cosmetic use. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 246-257 (菅原、2001の引用による)

Cash, T.F., Dawson, K., Davis, P., Bowen, M., & Galumbeck, C. 1989 Effects of Cosmetics Use on the Physical Attractiveness and Body Image of American College Women. *The Journal of Social Psychology*, 129(3), 349-355

飛田操 1996 化粧の個人的効果と対人的効果に関する実証的研究 コスメトロジー研究報告書、4 145 - 157. (飛田、2001の引用による)

平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 — 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 — 教育心理学研究、38, 320 - 329

平石賢二 1990 自己肯定意識尺度 堀洋道(監修) 山本真理子(編) 心理測定尺度集Ⅰ—人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉サイエンス社

岩男寿美子・菅原健介・松井豊 1985 化粧の心理的効用(Ⅳ)—化粧行動と化粧意識—日本社会心理学会第25回大会発表論文集、102 - 103

北山忍 1998 自己と感情—文化心理学による問いかけ—認知科学モノグラフ9、共立出版株式会社

眞榮城和美 2000 児童、思春期における自己評価の構造(東京国際大学大学院社会学研究科)応用社会心理研究、10, 63 - 82 (菅原、2004の引用による)

松井豊・山本真理子・岩男寿美子 1982 化粧の心理的効用(Ⅱ)日本社会心理学会第23回大会発表論文集、105-106

Miller, L.C. & Cox, C. L. 1982 For appearance's sake: Public Self-consciousness and makeup use. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 748-751 (菅原、2001の引用による)

村澤博人・大坊郁夫・趙鋼珍、李当岐1998 日韓中における顔の美意識の比較 第4回韓日美術解剖シンポジウム予稿集(村澤、2001の引用による)

永尾松夫 1983 女性における化粧意識 化粧文化、8, 133 - 144 (菅原、2001の引用による)

大坊郁夫 1991 外見印象管理と社会的スキル 日本グループダイナミクス学会 第39回大会発表論文集115-116

大坊郁夫・趙鋼珍・村澤博人 1991 日本と韓国の美意識比較研究 ポーラ文化研究所(村澤、2001の引用による)

大坊郁夫 2001 化粧と顔の美意識、Pp. 1-19、村澤博人 化粧の文化学、Pp. 48-63、菅原健介 化粧による自己表現、Pp. 102-112、飛田操 化粧のもたらす対人魅力、Pp. 114-122、大坊郁夫(編) 化粧行動の社会心理学 21世紀の社会心理学9 北大路書房

笹山郁生・永松亜矢 1999 化粧行動を規定する諸要因の関連性の検討 福岡教育大学紀要、48 (4), 241 - 251 (菅原、2001の引用による)

菅原健介・岩男寿美子・松井豊 1985 化粧の心理的効用(Ⅵ)—自己呈示としての化粧行動—日本社会心理学会第25回大会発表論文集、106 - 107

菅原健介 1993 メーキャップとアイデンティティ 資生堂ビューティサイエンス研究所(編) 化粧心理学、Pp. 155 - 160 (菅原、2001の引用による)

高木修監修、大坊郁夫・神山進(編)1996 被服と化粧の社

会心理学 — 人はなぜ装うのか — 北大路書房

山本真理子・松井豊・岩男寿美子 1983 化粧の心理的効用(Ⅰ)

日本社会心理学会第23回大会発表論文集、103-104

Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. 1966 Im-

portance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 509-516(飛田、2001の引用による)

(2005. 3. 受稿)